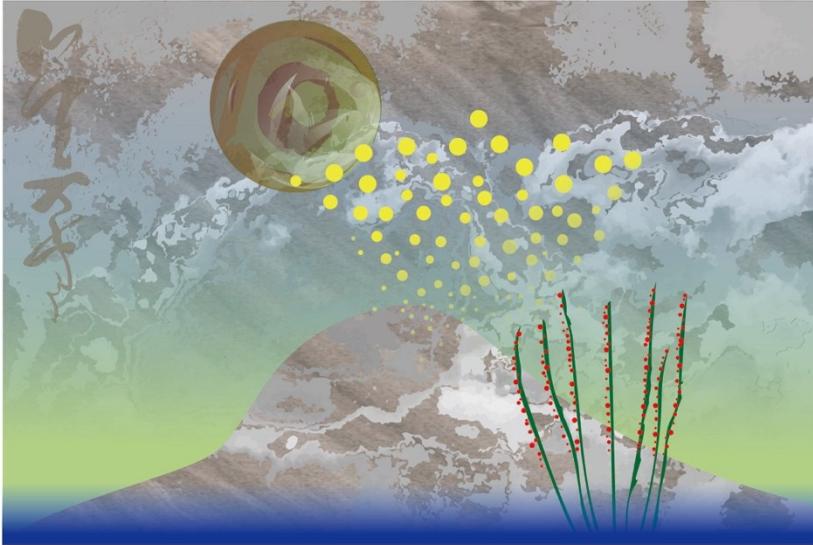


詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 29 号
2026 年 3 月

目次

伊東友乃	燦々(さんさん)	2		
	今 3			
関根全宏	空に、歌で	4		
	ステイル・ライフ	5		
栗原なつみ	絵画	8		
	水雪	9		
加藤春奈	青	10		
	白牙(しらさ)	ゆる夢	11	
岡本真佳	雨	12		
	冬の残り香	13		
松野叶実	水面月のほころび	14		
	やさしく機嫌を拾う朝	16		
	夕暮れ	17		
	正対なプロポーズ	18		
大野美心	ぼくの相棒	19		
	友達	20		
	導き	21		
	鳴る	22		
岩間朱寿	またここで息をする	23		
	それだけでいい	24		
	表紙原画・鈴木順三			
	「道表山 1」(表紙)			
	「道表山 2」(裏表紙)			
	空に落ちてった	25		
	兔になりたい	26		
	月明かりの部屋	28		
	冬は語らない	30		
	虚構詩編「氷雨に打たれて」	31		
	1 透きとおる光			
	2 眠れぬ時間			
	3 川底で光るもの			
	4 画用紙の記憶			
	5 夏の幻聴			
	6 雨を聴く部屋			
	7 滲み出す過去			
	8 氷雨に濡れながら			
	シメールの部屋で	46		
	——本江邦夫追悼詩			
	命を継承する者たちへ	48		

燦々（きんきん）

伊東友乃

生きているものの愛しさを感じるのは
風がつよい日がいちばんで
枝を切りとられたばかりの桜の大木が
燦々ひかりを浴びていたり
しげみに一輪だけの花が
ゴムのようにはずんで揺れていた
そういう景色のひとつひとつに
ころはゆっくりたなびきはじめる
時間は急かせるけれど
もうすこし風とともに在ってみれば
いろんな角度のなかで
愛しきものたちが いじらしく懸命に
その生を生きていると
空を仰ぎたくなる衝動に
わたし自身も また
伸びきるほどに
生きています

今

伊東友乃

宇宙まで　こちらで透明なすべり台を用意して
飛んでいく　という簡単なわけにはいかないか？
もう人類はじゅうぶんにクタクタで
短い集中力に慣れきっているので
未来ってなんなのさ　食べものかいって誰かは言う
時間軸は　のびるほどにやわらかいんだ
咀嚼することに気づかないほどに
だから　思いつきり今を突っぱねて
扉を閉めてみれば　困るほどにひとりの暗さ
開けてみれば　いちめん星空
胸はずしくなつて
生まれたたの　硬質な今が育ちきり
ガリつと噛める

空に、歌で

関根全宏

花束を放て
空に

墓碑をこすれ
歌で

声なき夜は
幻想

姿なき死者は
現前

ざらつく表面に
黒く
きざまれた字句は

ながれ
ゆくのだ

スタイル・ライフ

関根全宏

息

重たいリュックサックを背に
乱れた息を整える

二番線ホーム

邪魔にならないよう
黄色い線の内側に立つ

遠く四番線ホーム

下り電車が入る

おなじように

人波があふれ

等倍速で進んでゆく

階段のうす暗がりに

人々がながれ

消えてゆく

声

であいがしらの声をきく

自己主張強めの声を

一期一会の声を

希釈された声を

黙してきく

顔のないからつぽの

こえをきく

予期せぬ喪失の声と

投身する叫びは

消え難く断ちえない

とはいえそれは

たとえば拡声器からながれる

たとえば人身事故のアナウンスに

たやすく上書きされ

置いてけぼりをくろう

五番線ホーム

いかにも凡庸な

黒スーツの男が待つ

影

遠く六番線ホーム
下り電車がうごく
キヤリケースのシルエツトが
いれ違いに階段から現れ
途方に暮れる
背には陰影
その向こうには
昨日とおなじ太陽が
今日のひかりを空に残し
隠れている

わたしはわたしのなかを
とおり過ぎていった親しい友の
呼び声に身をかたむける
追憶が第二の吊いとなり
ふたたび吊いが返され
わたしのなかにも
生（ライフ）がながれる
黄色い線の内側で
上り電車を待ちながら

絵画

栗原なつみ

ぜいたくな額縁に囲まれた
しかくの中のカラフルが
とんではねて
あかるい光もくらい闇も
ふわふわもどろどろも
ほんのちよつとのわくわくも
ぜんぶぜんぶ一緒になつて
私のこころを染めた

水雪

栗原なつみ

空は一面真っ白で

冬の訪れを知らせてくれた

雪だるまに雪合戦

まっさらな地面にお絵かきなんていいかも

そんな淡い期待もすぐに溶けてしまう

足元に広がるのは水たまりばかり

青

加藤春奈

空と海が繋がる場所が　どんなに遠いか知らない

果てしない青

秘められた謎

人への脅威

地球が誕生してずっと存在している

青のきらめきに焦がれ

詩を読んだ過去の人

こうして綴っているこの言葉も

今よりそう遠くない未来

人は青のきらめきに想いを馳せるのだろうか

空と海は永遠であってほしいと願う

今までも　これから

白牙（しらさ） ゆる夢

加藤春奈

熱を求めた

吐息とともに 澄んだ空気

ああ、またこの夢だ

肌に刺さる痛み

指先にささくれをみつけた

何度目の夢だろうか

最後に青空を見たのはいつだったか

目を閉じれば夜は明けているだろうか

沈む、寒さに

遠のく、意識の中に

果てつく、声にならない声が

雨

岡本真佳

あの日の虹色も
あなたがいなければ悲しい空だった。
今は冷たさの中にしか
生きてる音がしないから
傘をさすかわりに
両手で空を受けとめた。

冬の残り香

岡本真佳

息が触れた
その距離だけ
まだ君を手放せない。

白い吐息が
消えていく街に
溶けていく君の温もり

水面月のほころび

松野叶実

川風がそよぐたび

水の月が細かくほどけていく

きらり、と欠片が浮かび上がり

草の影を抜けて舞い上がる

その軌跡が蛍の形をとるころ

世界の音が少し遠くなった

ふと気づけば

足元の土は淡い光を帯び

木々の葉は静かにささやいている

まるでここだけ

夜の外側に続いているみたいに

触れられないのに近い

見えているのに夢みたい

そんな光に導かれながら

私はそつと呼吸を合わせた

気がついたら

地上の月がいくつも生まれて

私の周りでゆっくり瞬いていた

やさしく機嫌を拾う朝

松野叶実

朝、ラテの泡がゆっくり沈んでいく。
友達の笑い声も、通知も、
今日はちよつと遠く感じる。

そんな日は、
お気に入りのイヤホンをつけて、
カフェの窓に映る自分に小さくうなづく。

誰かに元気づけてもらえなくても、
大丈夫。

私のご機嫌は、私の手の中にある
たとえ一瞬で消える泡みたいでも、
その一瞬をすくって、
少しでも自分を甘やかす。

夕暮れ

松野叶実

いつもより重く火照った私の体
ふと瞼を開くと見慣れた景色
変わらないのに寂しいと感ずるのは
この空間が薄暗いせいなのか
この重く感ずる体のせいなのか
それともお腹が満たされていないせいなのか
静まり返った場所へ足を運び
日に照らされた先に視線をやると
お弁当とメモ書き
そして鼻先に漂う大好きな人たちの香り
はやく夜にならないかなと
少し軽くなった体を横にした。

正対なプロポーズ

松野叶実

夜には穏やかな月

朝には活発な太陽

あなたを綺麗な月に例えたなら

私を太陽に例えてくれるかしら

太陽のように眩しくて

未来を照らしてくれる存在だって

そんなありもしない

二人だけの愛言葉

十字架の下（もと）で返してくれたら

死んだってかまわないわ

ぼくの相棒

大野美心

君はぼくの相棒
まだ何もない君に翼をつけよう
ぼくは君と河原で遊ぶ
君は風に乗って空へ行く
空高く上がる君はとても美しい
途中で強い風に襲われる
君は水辺に落ちてしまった
水に流され消えていった

友達

大野美心

浜辺を歩いていると
足元のボトルにつまづいた
中には少し黄ばんだ紙がひとつ
折りたたまれたそれを開くと
水滴で少し滲んだ誰かの字
早く帰ってお返事しなきゃ
私は息が切れるほど全力で走った

導き

大野美心

静かな夜 ひとりいつもの場所で
窓の外の光を見上げた
消えてもいいと思つた瞬間
聞きなれた声が脳に響いた
お前を迎えに来た
光はまだ 俺のそばにある

鳴る

岩間朱寿

山が鳴った
あるだけの大木を波立たせる程の風が吹いた時
風が鳴った
その時山が揺らいだ
遠くで見れば美しく
近くにいれば獐猛で
か弱い生物など寄せ付けぬような
例えば、人間とか

またここで息をする

岩間朱寿

呼吸と一緒に
言葉が出てきた

脆くて儂い
笑えるほど無様

また吸い込んで
大きく空気だけを吐き出した

大丈夫
かもしれない

この世界でまだ
息をしている

それだけでいい

岩間朱寿

サンドイッチが届くまで
次の電車が来るまで
新幹線のアイスが溶けるまで
遅刻した友達が来るまで
信号がまた青くなるまで
通り雨が過ぎるまで
サヨウナラが伸びるなら
もう少しだけ
この時間をください

空に落ちてった

岩間朱寿

空に落ちてった
いや、海月がいる
じゃあ水の中？
でも息ができる
あっ夢の中？

体をぐるり回したら
世界もぐるり回りだす
吐いた息が泡になって
腕から手をつたって
水面に上がっていく
弾けた泡が星になって
世界も弾けて

兔になりたい

岩間朱寿

十五夜を眺めてる

餅つきしてる兔は寂しくないね

地球人全員と友達だもん

お月見団子に爪楊枝を刺したら

空に掲げて月に重ねて

見て、月食

そのままパクって食べちゃった

月光の下無邪気な笑顔が

さながら夜の太陽で

してやられたから

手で掴んでお月見団子は腕を伸ばして

月から落としてそのままパクリ

もういつそ兔になりたい

地球人全員と友達だって

餅つきしてる鬼は寂しくないよ
十五夜が眺めてる

月明かりの部屋

永松佑香

深夜一時に

ふと目が覚める

窓に浮かぶのは

半分の月

窓辺に置いた

花のない花瓶さえも

愁を帯びている

カーテンの隙間から

こぼれ落ちる月明りは

より鮮明に

静かに

部屋の輪郭を

浮かび上がらせる

時間が経つほど

その輪郭は
ぼやけてゆく

何ひとつ変わらない夜に
少しだけ
背伸びをしたくなった

冬は語らない

永松佑香

指先をこすりながら
暖をとる

いつの間にか
ため息は白くなり

木々は葉を落とし
寂しさを纏う景色すら

沈黙を保ったまま
何も答えなかった

虚構詩篇

「氷雨に打たれて」

潮見蓮

1 透きとおる光

夜が 静脈のように街を流れる
窓の灯が消えて

街灯と街灯が 光を繋ぐ

小さな部屋で 小さな灯を点ける
手の中の万年筆が
脈打つように震える

書くとは 誰かを許すためだろう
だが おれは 許せないままに
何度も書き直す

草稿の外に かすかな光がある
それは確かだから その光を
掴もうとして ペン先の息が荒くなる

いや ひよつとして
許して欲しいのは
おれの方なのだろう

深呼吸を一つして
簡潔 正直 正確に
さあ 事実を書いてみたまえ

2 眠れぬ時間

久しぶりに万年筆を握ると
指のあいだから 何かがこぼれる
いや 小さい風が 吹き抜けたのかも知れない

今は2月 夜には
街の猫たちが 番いを求めて

屋根の上で うるさく鳴きわめく

でも おれは 久しく

あのひとの名を呼ばなくなった

確かに あのひととは 別れたが

あれは 声を奪い 言葉を失わせた

今も ペン先の一つ一つの動きが

遠い記憶の手掛かりを探す

そう 鼓動や呼吸のように

密やかだけど 生命の支えとして

おれは なお あの冬の光景を探し続ける

それは だが 名残りか

よすがか なお じぶんに

生きよと命ずる理由なのか

窓を開けると 冷たい風が頬をなぞる

おれの皮膚が強張る

それは おれの意志ではないが

窓の向こうで まだ眠れない時間が
無数に 浅い息づかいをしている
すぐまた 春が近い

3 川底で光るもの

あの頃 下宿の裏に ひと筋の川があつた
排水路に近いドブ川だった
川は 町の端をゆるく曲がり
どこかへ吸い込まれていった
ずぶ濡れになつた猫の死骸も放置されていた

春の終わりのある朝
その川縁に女が立っていた
確か スカート姿で 下駄を履いていたと思う
はだけた白いブラウスの袖をまくり
腕組みをしていた
顔は見えなかったが
女が 一瞬 太陽を仰いで髪をかき上げた

朝陽が 女の腕の産毛を 金色一色に弾いた

その時 衝動が おれの身体を走った
後で知ったことだけれど

女は 男の部屋で壁に押し付けられて

やっとのことで逃げ出したのだが

いや こんな川で死ぬるか

と思い直したらしい

女は この川の源流の方に住む保育士だった

「男なんて馬鹿馬鹿しい あんたも男でしょ」と詰られて

名まえを名乗りあうのに時間がかかった

けれど 彼女の声は 最初からなぜか懐かしかった

二十歳のおれは その声を詩にしたかった

正直言って 愛とか恋とかじゃない

断片を書いて 夏が過ぎる頃 女に幾つか見せた

女は 黙って読んでいた

それから 言った

「あんた 分かかってない もう行きなよ もう来ないで」

それだけだった それで終わった

秋が過ぎ 静かに 冬が来た

彼女が遠くの街へ引越したと聞いた

あれから二十余年

カオルは 今 どこにいるのか？

おれは 今 詩を書いていないが

大学で文学を教え

若い学生たちと詩や小説の話をする日々だ

それでも夜になると カオルの声が耳の奥でかすかに聞こえる

聞こえる？ いや 言葉でなく 音でもなく

気配のような 残響のような

「あんた 分かっただけ もう行きなよ もう来ないで」

ある晩は 夢の中

あの川のほとりに おれが立っていた

流れの底から 朝陽が立ちのぼり

カオルの声のようでもあり

息のようでもある気配が

いや あの衝動が おれの身体を走った

久しぶりにペンを握った

書きはじめると ペン先が勝手に動く

眠っていた声が 手の中で

まるで 再び 呼吸を始めたかのようにだ

4 画用紙の記憶

あの冬 興味本位で通い始めたデッサン室は いつもどこか乾いた匂いがした壁際に並んだ石膏像に埃が積もり いくつかは手や足 指が欠けていた暖房がほとんど効かず 学生たちは 手のひらをこすり合わせながら鉛筆や木炭を握る

その中に ヒトミがいた 隣の椅子だった 短く切った髪に いつも焦げ茶のセーター

彼女が画用紙に線を引く時 迷いがなかった 鉛筆の音がすうっと空気を裂いて

なぜか おれの何かを掻き乱す

その何かを知りたくて 一度 ヒトミを誘ったことがある 何もわからなかった

ある日 新しいモデルが遅刻して すぐには授業が始まらなかった ヒトミは 画用紙に鉛筆を走らせていた

新しいモデルが毛皮のコートで現れ 悪びれることなく 教室の前方中央に立ち

クラス全体を見回した後 おもむろに コートを脱いだ 彼女は すでに 裸婦の立像だった

教室に驚きの声が溢れた

だが ヒトミは 黙して冷たく見詰めていた
モデルが腕を伸ばし 指先を一人一人に向けていった
次第に静かになり 思い思いに デッサンが始まる
モデルの指先が ヒトミで止まった
二人が睨み合う
ヒトミは 突然 左右の手に一本ずつ
先の尖った鉛筆を握って立ち モデルの左側に立つと
大きく両手を開いて振り上げて
モデルの背中と胸に 鉛筆を振り下ろした
鉛筆が長い錐だったなら モデルの心臓を前後から貫いただろう
悲鳴と 喚き声 睨み合う二人
殺人？ 芯が刺さっただけだろ 鉛筆で人を殺せるか
芝居？ 二人は知り合いか
そもそも おれたちには 逸らす目が似合う
見ること 見ないことの境界を 皆が探っていた
ヒトミは 昂然として 教員に連れ去られ
モデルは 平然として ポーズを取り続けた
そこには 理解不能な蠢きがあった
一つは立ち去り 一つは立ち続ける
その教室を おれは あとにした もう戻らなかつた
去り際に ヒトミが残した画用紙が見えた

そこには　すでに裸婦像があった
胸にナイフが突き刺さっていた

5 夏の幻聴

蝉の抜け殻が　ひとつ
欄干にぶらさがる
そこにあつたはずの生命が
まだ　わずかに震える

あの年の夏　サトルの身体は
一連の儀式の中へ溶け込むように
消えていった　白い布に包まれて
光だけが残った

おれは　その光を描写しようとした
だが　原稿用紙の上で
光は　何も語らない
語らないことが　友に似ていた

また欄干に立つと

遠く 蝉の鳴き声とする

だが 本当に 遠くなのか？

近くの電信柱の中から 響くようでもある

いや 意味もなく 耳の中で反響しているようでもある

おれの中で何かが発狂し

何かが壊れるのだろうか

欄干に立つて 放尿でもしてやろう

6 雨を聴く部屋

壁のうすい部屋 雨の音

水の粒が 今も 屋根をたたいて

リズムカルに遠い人たちの名まえを呼んでいる

雨は 固有名詞を忘れない

すでもう 過去のことだが

あの人たちとは 二十年 会っていないが

おれが おまえを去らせた・・・

おれが おまえを墮落させた・・・

おれが おまえを殺した・・・

机の上に 書きかけの草稿がある

でも これは おれが書きかけたのではない

書きかけの年賀状もそうだ おれじゃない

電球が ひとつの孤独を照らす

孤独が 影を落とす

だが 影は ひとつじゃない

カオルが ヒトミが そして サトルが

今も 裸足でやってくる

泥だらけの裸足でやってきて

おれに 足を洗えと命ずる

隙間風がカーテンを揺するたび

おれも揺さぶり おれに記憶を擦り付ける

ああ 匂いのように 雨がしみこむ

夜になると 屋根裏の方から

足音が ゆっくりと聞こえる

おれが隠す言葉を はっきり書き出せと

おれの手を取って ペンを握らせる

眠ることを許さず 雨の音のなか おれを追い詰める

やつらが 薄ら笑う

おまえは 生きるためには まだまだ
練習が足りないのだと

7 滲み出す過去

そして 四十歳

四十歳に 何の意味もない
区切りにもならない

何度も白紙に触れて 筆を置きたび
過去が滲みだす

頭じゃないんだ 足元から身体の中へ
滲み上がって来るんだ

そして 滲んだ場しよから
滲みの痕から 叫びが聞こえる

おれは 叫んで叫んで 過去を押し込めようとする
だけど あの人が「あんたって 嘘つき」と詰り

その人が「ふん 意気地なし」と絵筆を突き出し

この人は「母ちゃん 母ちゃんに会いたい」と走り出す
おれは だけど どれにも応対しなかった
他人事みたいに 冷たいものに身を任せ

「どうせ すぐに元に戻るさ」と嘯いていた・・・

あのとときどきを ちゃんと思いつ出したほうがいい
れんげ畑の匂い

黄色い絵の具

投げ捨てた豚まんじゅう

世界の全てが 痛みのかたちで おれに迫る

おれも同じ仲間だという誤解

一瞬の輝きが永遠だと思ふ幻覚

痛みが未来への踏み台だという欺瞞

それぞれの瞬間を おれは 他者に押し付けてきた

だから 思いつ出す

思いつ出す度に

叫びで 全てを否定してきた

だが それでいいのか 四十歳

四十歳が終われば 四十一歳ではない

この四十歳は まずこのままでは 終わらない

机の上の灯は　いつも点いているだろう
このままなら　次第に草稿が部屋中に散らばって
いつか　大声で叫びながら　火を付けたくなるだろう

8　氷雨に濡れながら

おれは　またもや　嫌な夢を振り払おうと
布団を跳ね上げ
寝巻き姿で　外に飛び出す

外は　雨だ

若者が　傘を差さずに　欄干に寄りかかり
川底を覗き込んでいた

若者は　サトルではない
多分　誰かが　川底から
若者に微笑んでいるのだろう

猫の死骸は　ヒトミではない
川べりでおれを待つ女が

もう いるはずがない

雨のしずくが 土を叩いて 土に混じる
しゃがみこんで ひと握りの泥を手にとる
冷たい泥だ 冷たいぞ カオル

耳をすますが 何も聞こえない
おれは なお 濡れてゆく
氷雨は 冷たい

シメールの部屋で——本江邦夫追悼詩

渡辺信二

輪郭もなく 名もなく 漂うかたち
オディロン・ルドンの黒が隠すのは 何か
彼は 見つめつづけた

視えないものに輪郭を与え
その黒の奥に潜む
妖（あやかし）のシメールを蘇らせるために

やがて まなざしが 暗闇を切り拓き
整理し やがて●▲■が浮かぶ
それは 形象として
絵の謎に迫る手がかりだった

今 その人は ここにはいない
だが そのまなざしは なお
今も 鋭く刺さる
この黒への問いを抱いたまま

本江 邦夫は、我が師友。

1948年9月25日愛媛県松山市生まれ。東京で小学校入学、中学2年の夏まで札幌で過ごす。過ごすのが、痛恨の札幌であった。

1968年東京大学文科3類入学、同人詩誌『海軟風』や『シメール』を率いる。

1973年東京大学文学部美術史学科卒業。1976年同大学院修士課程西洋美術史専攻修了。同年秋より東京国立近代美術館勤務。1981年マチス、1983年ピカソ、1987年ゴーギャン、1989年ルドンなどの回顧展を手がける。1998年多摩美術大学教授。2001年～2009年府中市美術館館長兼任。2019年多摩美術大学名誉教授、同大学美術館長。

2004年『オディロン・ルドン』で芸術選奨新人賞受賞。2019年6月3日19時30分、心筋梗塞のため、東京都内の病院で死去。70歳であった。

『●▲の美しさって何？ 20世紀美術の発見』（ポプラ社 1991）、『オディロン・ルドン 光を孕む種子』（みすず書房 2003）、『現代日本絵画』（みすず書房 2006）など著書・編書多数。

(Wiki等参照。削除・改訂あり)

命を継承する者たちへ

渡辺信二

それゆえ

わたしはおまえたちへ 命ずる

おまえたちもまさに 最期の者として 語り継げ

おまえたちの言葉 確かに 響け

詩でなくてもよい おのれの言葉を語るなら

闇の中でも光る 嵐の中でも走る

光が影を生じ 走れば影を伸ばし

悪をおおい 邪を飲み込むだろう

いよいよ おまえたちは

パウル・ツェランを呼び出すのだ

命は 言葉を交わし

なお 言葉を交わし合う者たちとともに

その者たちの働きでのみ

繋がれてゆく

★詩誌『立彩』のホームページを開設しました。バックナンバーも
閲覧できますので、下記 URL および QR コードよりご覧ください。

<https://www.rissai.com>



2025年8月1日から2026年1月31日までに贈られた詩誌等一覧

○詩誌

『コールサック』123号、124号。

『孔雀船』107号。

『Culvert』12号。

『橋』174号。

『白亜紀』173号。

『万河・Banga』34号。

○詩集

太田雅孝『裏木戸』待望社、2025年。

網谷厚子『ひめ日和』思潮社、2024年。

野木京子『廃屋の月』書肆子午線、2024年。

ハーマン・メルヴィル『南北戦争詩——近代総力戦へのまなざし』牧野有通監訳、小鳥遊書房、2025年。

ロバート・フロスト『少年の心』藤本雅樹訳、小鳥遊書房、2025年。

○その他書籍・作品集・論文・エッセイなど

ジェイン・オースティン『ノーサンガー・アビー』唐戸信嘉訳、光文社、2025年。

新田啓子『アメリカの黒い傷痕』青土社、2025年。

小野節子『ラフカディオ・ハーンとピエール・ロティの見た「日本」』牧野理英・田之口誠吾訳、小鳥遊書房、2025年。

蒲池美鶴『私は小学生』（改訂新版）創元社、2025年。

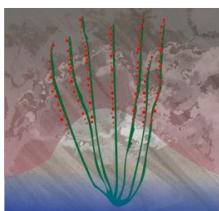
入倉文子『あじさい』（エッセイ集）、協立コミュニケーションズ、2025年。

日本スパンサー協会編著『スパンサー・ハンドブック——詩人と作品ガイド』開文社、2025年。

谷村しげを『句集 一人百句』多摩退屈庵、2025年。

片山臺晴『随想句集 続 嘴野記』コールサック社、2025年。

関西英米文学研究会『英米文学手帖』63号。



詩誌『立彩』第29号 2026年3月20日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

印刷 株式会社DTP出版 TEL 03-5621-4531